

第 4 1 回 市民参加推進フォーラム会議 摘録（抜粋）案

- 1 日 時 平成 2 5 年 1 1 月 7 日（木）午後 6 時 3 0 分～午後 8 時 3 0 分
- 2 場 所 こどもみらい館 4 階 第 2 研修室
- 3 参加者 市民参加推進フォーラム委員 1 3 名（伊藤委員，菅原委員，小辻委員，芝原委員，菅原委員，高田委員，竹内委員，辻委員，西野委員，野池委員，本城委員）
- 4 傍聴者 1 名
- 5 特記事項 動画共有サイト U s t r e a m（ユーストリーム）による会議のインターネット中継を実施

（1）協働の日（仮称）検討部会の進め方について

<谷口>

両部会の議論を進めてきた。各部会に参加できていない人もいたので，その方からも意見をいただきながら，議論を深めていきたい。

<永橋副座長>

この部会は「協働の日」の検討といっているが，特定のセレモニー的な日を設けることを目指しているものではない。1 日だけのセレモニーではなく，いままでの協働の在り方を考えたり，社会に関心がなかった人や関心があるけど動けなかった人に活動に参加するきっかけを提供したり，または既に活動している人が自分の活動が市民参加や協働であることに気付いてもらい，自らの活動の意義を感じてもらうことを目指そうとしている。

協働の取組といっても様々なテーマがあるので，第 2 回会議でテーマを絞り込み，若者の活動の支援やつながりを生むことを目指すこととした。第 3 回会議では，若者の総合的支援を行うユースサービス協会と中高生に家と学校以外の場所を提供することを目的に活動している京都府立大学地域連携センター学生部会かごらに参加してもらい，それぞれの取組を紹介してもらった。若者に関する様々な課題を把握したうえで，既に活動している団体が課題を共有しながら，お互いにエンパワーメントできる場があると良いという議論があった。

次回の会議では，来年度から具体的に動ける企画案を考える。例えば，出会う場を作るのであればどのような団体があり，誰を呼ぶのか等，具体的にどのような企画にするのかを議論したい。

<谷口座長>

では，ご自由に意見を頂きたい。

<伊藤委員>

かごらの話を聞いて私が持つ若者の活動に対する二つの先入観と違うと感じた。1 つ目はイベント好きであると思っていたが，かごらは地道な活動をしていた。2 つ目は，若者

はSNSを駆使して仲間集めをしていると思っていたが、かごらは口コミで仲間が集まっていた。一方で、メンバーの拡大に苦慮していると思ったので、顔を合わせて出会える場づくりが必要だと感じた。

<谷口座長>

第3回会議では、ゲストも交えて議論したことで、フォーラムだけでは見えにくい現場の活動も見えて良かったと思う。

<菅原委員>

学生が地域との連携が難しい背景として、安全面やプライバシーの問題があった。若者が地域で活動しやすくなるよう、フォーラムが仲介する必要があると思った。

<永橋副座長>

先程の報告に補足したい。かごらは中学高校にアプローチして、家と学校の往復だけになっている中高生を大学生がフォローしようとする取組である。しかし、中学高校の先生に話しても、団体を信用してもらえないことや生徒の安全確保やプライバシーの点から活動が進まないという課題があることを話していただいた。そういう団体が社会的信用や社会的意義を獲得するために、行政、関係機関、フォーラム等が連携をサポートすることが必要という認識があり、出会いの場を作ることが大事であることを確認できた。

<谷口座長>

子どもたちがやりたい気持ちを止めないことが大事という話もあった。あまり作り込まないプログラムが必要だ。他に意見はないか。

<本城委員>

部会では、まだ若者に参加してもらうのか、若者に働き掛けるのかが決まっていない。また、どのくらい継続的な取組とし、各年でテーマや予算をどうするのかが分からないので、とまどっている状態である。

<谷口座長>

これまでの議論を再度確認したい。協働の日は特定の日を定めるのではなく、1年間又は2年間で対象やテーマを定めて、関心はあるけど参加できない人の参加の機会を提供しようとするものである。部会では、若者に焦点を当てて、市政や地域活動に参加したり、市民参加に関心を持つ若者を増やすには何が必要かを検討してきた。座学だけでなく、体験できる機会の提供があると良いという確認をしたと思う。

他の委員からも疑問やアイデアを頂けたらと思う。

<永橋副座長>

1年間を通じて協働の実験を繰り返すイメージを持っている。部会にはこれからユースサービス協会やかごらが積極的に参加され、部会そのものが協働の場、協働の日の序章となっている。とまどいは大事にしながら、議論を続けることが大事だと思う。

<辻副座長>

こちらの部会には参加していないので、対象者について確認したい。若者といっても年齢層が広いどのくらいの年齢層を対象とするのか。また、既に活動しているが広がりの中で困難を感じている人とまだ参加していないが少し背中を押してあげれば参加する可能性のある人のどちらを対象とするのか。

<永橋部会長>

青少年活動センターは、青少年を13歳から30歳までとしている。協働の日で対象とする若者の定義は、まだまだ議論する段階にあると思っている。実年齢にこだわらず支援すべきではないかと思っている。

<小辻委員>

市民参加は実はみんなが既に行っていることだが、条例化して定義付けしないと分からない不思議な状態になっていると感じる。

サービスをされる側とする側の役割分担を考え直す日になると良いと思う。体育振興会の運動会には中高生も出ている。中高生の参加者は親が頼まれて出ている人も多いので、親をいかに巻き込むのかと思った。

<芝原委員>

部会には参加していないが、私の団体の対象が若者なので、日々の活動で考えていることも含めて2つ話したい。

対象者の設定については、無関心層、関心あるけどまだ動いていない層、既に活動している層のどの層を対象にするのか。誰をどういう状態にすることを目指すのかを丁寧に設定する必要があると感じた。

ここ2～3年で特に無関心層を動かすことに難さを感じている。参加したいけど参加しない人が参加しない理由としては、知らないところに一人で行くのは怖い、時間がないといったものがある。参加につながる方法として手応えを感じているのは、「若者が信頼している人からの声掛け」である。若者の身近にいて信頼されている大人にどれだけ協力してもらえるかが重要だと思う。例えば、大学に協力してもらうなら、大学の先生から直接学生に対して声掛けをしてもらうようなことがなければ、動こうとする人はいない。

もう一つはエリアを絞ることである。全市では広過ぎるし、区でもまだ広いと思うが、もう少し身近に感じられる程度のエリアの設定の必要があると感じた。

この部会のテーマは、私自身が日々課題に思っていることなので、フォーラムで何か解決策を見つけられると良いと思った。

<谷口座長>

無関心層に参加してもらうのは難しいと思うし、市民参加は義務的にしてもらうものでもない。まずは関心のある人に参加してもらうことが大事だと思う。

地域コミュニティの活性化の観点からエリアを絞り込むことは大事だ。学区レベルでそういう取組があると面白いと思う。若者が活動しやすい環境を作るには、大人が若者の気持ちを知ることが大事だと思った。

情報発信については、京都新聞で地域社会を良くしようとする取組を特集してはどうかという話もあった。新聞なら定点的な情報発信があり、効果があるという話もあったと思う。

地域社会の観点から大西さんから意見をいただけないか。

<大西委員>

私の住む右京区には区民会議がある。自治会連合会に若い世代を選出してもらえるようお願いをしている。ひと世代は若いグループになる。行政区や地域のことを考えるようになると、若い人と話す機会が増えてくる。世代が離れており、親しみを持って話しにくい状況がある。PTAのグループが動くと変わってくるのではないかと期待している。行動を起こさないといけないし、同世代に近い人に動いてもらう必要がある。地域でもすべきことはたくさんあるので、それを取り上げていく必要がある。地域社会の一員として地域や市政に関わるように働きかけることが大事ではないかと思う。

<野池委員>

事業企画案の作成に当たり、取り組んでいる事例も伝えられれば思う。ユースビジョン及びユースサービス協会と協働してキャンパスプラザで「学生 Place+」に取り組んでいるので、大学生の事例は紹介できると思う。

<西野委員>

私たちの団体では小中学生を養成して一緒に福祉施設にいく取組をしている。こうした取組も協働の日の取組ととらえて活動すればよいのか。

<永橋副座長>

活動内容が協働の日の取組に含まれるのかという質問だったと思う。まだ答えは出せないが、部会でしていることがコミュニティといかにつながれるかが重要だと思った。部会では様々な方の声を聞きながら謙虚に考えていく必要があると思う。

<谷口座長>

大人が若者の市民参加を考える機会にするということもあり得るかと思った。

<高田委員>

学生は一時的に京都に住んでいる人もおり、総体的には市民意識が弱いと思うが、学生が参加するための下地を作ることは大事だ。一方で、団塊の世代が退職して地域に参加しているが、特に男性の中には地域に参加したくてもできていない人もいる状況であるが、なぜ若者を対象にしたのか。

<谷口座長>

計画策定時から子どもや若者の頃から社会を良くする活動（市民参加）に触れる機会を設ける必要があると話していたこと。また、昨年度のフォーラムにおいて若者の参加を考えていたことから、継続性も考えて今年度も若者を対象とした。

部会では、対象として子育て世代や団塊世代等といった意見があった。そのときの社会状況に応じて、対象やテーマを決めることを話していた。

第2期市民参加推進計画の中では、市政への参加や行政と民間の協働だけでなく、新たに民民の連携について記載した。

時間の都合上、次の議題に移りたいと思う。部会では、芝原委員からまとめていただいたように、対象をどうするのか、エリアをどうするのかについて、次回の部会で議論して具体的な企画案を練り上げていきたい。

（２）協働のルール（仮称）検討部会について（未定稿）

<芝原委員>

これまでに３回の議論をしてきた。部会の名称となっている「ルール」という言葉に縛られず、協働を進めるために良いものを作っていこうというものである。この部会では、組織対組織の協働をイメージしている。行政とＮＰＯだけでなく、民民の協働も含めて考えていきたい。

１回会議では、各委員から協働の事例を持ち寄って議論をした。ここでは、勤務形態が違う団体では業務の進め方が違うという事例や情報共有の方法が組織文化によっても違うという事例が話された。

２回会議には、京都府府民力推進課の鈴木課長をお招きして、協働の宣言「京都ウェイ」の策定過程や課題について意見交換を行った。それを踏まえて、フォーラムでは「京都ウェイ」と同じものを策定するのではなく、相互に補完できるとものが作れたら良いという方向性を持っている。京都市は「京都ウェイ」にまだ署名できていないので、改めて署名を検討しても良いのではないかという議論があった。

協働を進めるには「出会う前」と「出会った後」の２つの段階があるという議論があった。部会では、「出会った後」に起こるであろうトラブルをどう解決するのかを記載したヒント集のようなものを作成できると良いと考えた。スローガンのようなものではなく、具体的に協働して悩んでいる人に使ってもらえるものとしたい。まずは簡易なものを作成して、改良していくものであるというアウトプットのイメージを共有した。

実際に協働に取り組んで困ったことがあった方に集ってもらい意見交換する市民参加円卓会議を開いて具体的な事例等を集めていきたい。

真っ最中のトラブルは話しにくいという議論があった。

<伊藤委員>

行政とＮＰＯの協働が中心になっているのではないか。地域や企業との協働をもっと考えなくて良いのかと思う。商工会議所のＣＳＲ担当の方にも参加してもらえないだろうか。

<小辻委員>

失敗事例や乗り越えた事例を丁寧にまとめていく必要がある。各団体の内部に蓄積されていることを整理して公開することが、取り組みを始めた団体には参考になると思う。覆面座談会のようなものを開催して、様々な団体から意見を出してもらい、まとめていきたい。

<西野委員>

協働のルールのイメージについて、会議の回を重ねるごとにイメージができた。協働における様々な問題点を仲間内でしか話さない。他の団体の失敗事例があると自分の団体と照らし合わせて、新たな気付きにつながると思うので、ヒント集ができることを期待したい。

<谷口座長>

様々な立場の人に集ってもらい、困り事や失敗事例、乗り越えた事例を話してもらう場を設けたい。その議論の要点をまとめたものを作成して、広く伝えることができると良い。伊藤委員から提案のあった部会に関係者を呼び話してもらうこともアイディアとして良いと思う。

<辻副座長>

企業を呼ぶことはできると思うか。

<本城委員>

製造業は活動そのものがC S Rととらえているところが多い。ある地域では、地元企業が就職活動に消極的な方を試しに採用して、地元で就職する人材を増やそうとしている。大企業はそのような自由度が少ないので、対象とするなら地元企業になると思う。

<野池委員>

まだ幅広いようなので、絞り込みの議論が必要だと感じた。

第4回会議で、円卓会議や成果の広め方について記載があるが、この点について教えてもらいたい。

<谷口座長>

円卓会議はテーマを決めて市民の方に来てもらい語り合う場である。昨年度は若者の市民参加をテーマに議論した。当部会で円卓会議を開催してはどうかと考えている。

<野池委員>

全国で円卓会議が開催されており、沖縄の円卓会議は興味深い取組だと聞いているので、参考にできるのではないかなと思う。

<菅原委員>

連携を生み出していくため、行政や中間支援組織が地縁組織の方にNPOを紹介することが大事だと思う。

<谷口座長>

出合いの段階から支援する必要があるという指摘だと思うが、十分に成果が出ていないのではないかな。

<高田委員>

組織設立のヒント集のようなものは作成しないのか。

<谷口座長>

行政主導で取り組んでいるものが多いので、当事者間で議論して決めていくことが大事なのではないかというものである。協働のマニュアルやヒントがなく困っているところに、参考となるものを今年度中に作成しようと考えている。

<永橋部会長>

成功事例はあまり参考にならないので、失敗事例から学べるものを作成することは良いと思う。協働のルール部会も協働の日部会も協働のルール部会の活動とリンクする必要がある。

フォーラムの強みは2つある。一つは、「手引き」「ガイドブック」等といったテキストを作成することである。もう一つは、サロンや円卓会議のように場をデザインすることである。

日や時間そのものをデザインするのは難しい。人の時間を束縛するものではない。場をデザインすれば、自分だけでなく、他人も同じだと気付くことができる。

フォーラムが若者を支援するわけではない。既に取り組んでいる団体が元気になるようにして、その結果、動けなかった人が関わっていくための場をデザインすることが時間を共有することになる。協働の日検討部会でも議論していきたい。

<谷口座長>

本日の議論でアイデアが出てきたので、各部会の議論にいかしていただきたい。協働の日は企画して次年度実施の予定である。協働のルール部会は今年度中に形にしようと考えているので、引き続き議論をお願いしたい。